

肉食とヴェジタリアニズム.. キャサリン・マンスフィールドの『ドイツの宿にて』

三神和子

(一)

キャサリン・マンスフィールド(一八八八—一九三三年)の作品には食べものがよく登場し、またを食べている場面もじつに多い。特別な事件があるわけではない平穏な日常生活を描き、そのありふれた生活のなかから主人公の精神的啓示の瞬間を提示してみせる彼女の作品に、食べ物や食事の場面が頻繁に描かれるのは当然のことかもしれない。しかしマンスフィールド自身が食べ物や食べることに関心の高い作家であった。第一次大戦の食糧難を経験しただけでなく、肺病を発病した後、滋養強壯を求めて、毎日の食べ物に気を配り、大食漢であったことから、彼女は食べ物や食べることに関心を払い、その日の食べ物をよくノートブックにつけたり、手紙に書いたりしていた¹⁾。また、子供の頃の写真を見ても、太り気味であったことを考えると、彼女が食べることが好きであったことは容易に推測できる。

この食べ物への関心が高いなかで、作品においても、彼女は食事や食べ物に注意を払い、象徴として使用して、筋の点でも重要な役目を与えていることが多い。たとえば、「ガーデンパーティー」(一九二〇年)におけるクリームパフは、エデンの園のような世の苦しみを排除した庭で暮らすローラに、近所の若い荷馬車屋の事故死を知らせ、彼女を庭の外へと向かわせる重要な働きをする。エデンの園の禁断の木の実の役を果たしている。また、「ブリン嬢」(一九二〇年)における蜂蜜のかかったケーキの一切れは、ブリン嬢の一週間に一度の楽しみごとであり、他になんの楽しみもない淋しくつましい生活を彼女が送っていることを教え、物語の最後に彼女がそれさえも買わなかったことは、言葉を使用することなく彼女の絶望の深さを読者に知らせる働きをしている。象徴主義者である彼女の腕の見せ所である。したがって、パトリシア・モランのように、彼女の作品を食べ物の視点から読み解く研究者も少なくない²⁾。

このように食べ物の視点から彼女の作品を読むとき、肉食とヴェジタ

リアニズムの対立が前面に打ち出されている作品がある。『ドイツの宿にて』（一九一一年）に収録されている「食卓のドイツ人」である。また、よく読むと、この作品集の他の幾つかの作品においても、この対立が潜ませているのが判る。『ドイツの宿にて』に収録された作品のうちドイツを舞台にした作品は全部で十一作品あり、それらは、「疲れた子」、「食卓のドイツ人」、「男爵」、「ルフト・バート」、「レーマンの店で」、「ブレット・ヘンマツヘル」の細君結婚式に出る」、「男爵夫人の妹」、「フィツシャー夫人」、「誕生の日」、「近代的な女性」、「進歩的夫人」である。これらは「疲れた子」を除いて、一九〇九年六月から一九一〇年一月まで彼女がドイツのバイエルン地方の宿屋にいた時の体験をもとに描かれ、一九一〇年二月からウイリアム・オレイジとビアトリス・ヘイスティングスの編集する月刊文芸誌『ニュー・エイジ』誌に掲載された作品である。一九〇八年あこがれのロンドンにニュージールランドからやってきた彼女は翌年、突如として年の離れた音楽教師と結婚、その夜に出走。以前から好きだったアーノルド・トラウエルのもとに身を寄せるが、それもうまくいかなかった。しかしトラウエルの子供を身ごもっていたことから、ニュージールランドから泡を食って駆けつけた母親によって、ドイツ、バリア地方の修道院に入れられる。しかし子供を流産し、そこを出て、彼女は保養を口実に民宿で暮らした。その約半年間の体験をもとにドイツ人の辛口のスケッチを描いたのがこれらの作品である。これらの作品の一貫したテーマは、二つあって、一つはドイツ人批判、すなわち、自信たつぷりで思い込みの激しいドイツ人をおろかと思え笑う視点である。一九一〇年という第一次大戦前の時期であったこともあって、彼女の作品は評判がよく、一九一一年他の作品と合わせて、単行本になった。すべての作品に貫かれているわけではないが、もう一つの大きなテーマ

はフェミニズムの視点のもので、子づくりを女性の使命と捉えることに反対する主張である。この主張はこの作品集の幾つかの作品のなかに、たしかにくつきりと明確に打ち出されている。おそらく、このフェミニズムの視点の背景には、これらの作品を描いていたとき、雑誌の掲載と実生活において世話になったフェミニスト、ビアトリス・ヘイスティングスの影響があるう。³⁾この二つのテーマが然りと混ざり合い、女性の使命を子づくりと信じて疑わないドイツ人への批判としてあらわれている作品もある。「ドイツ人の食卓」はこの二つのテーマが見事に混ざっている作品である。

しかしながら、のちの彼女の子供が欲しいという願望や、彼女がロンドンにいた一九〇八年九月、女性参政権の集会に出席したものの、「自分分はサフラジエットにはなれないと判断した」（一巻、六十頁）と友人のガネット・トラウエルに書いていることを考えると、彼女がどこまで本気でフェミニストだったのか、また、女性参政権を考えていたのか、本心はつかめない。

肉食とヴェジタリアニズムの対立は、この二つのテーマのなかでも、フェミニズムのテーマを表すとき、たくみに組み込まれている。熟知しているわけではなくても、マンズフィールドがヴェジタリアンの存在を知っており、その主義主張を聞きかじっていたことは確かである。たとえば、ジョージ・バーナード・ショウやエドワード・カーペンター等⁴⁾、彼女の知人のなかにヴェジタリアンがおり、おそらく、彼らからその主義主張の一端を耳にしたこともあつたらう。彼女がヴェジタリアンになることはなかったが、ヴェジタリアニズムを意図的に作品に使用したことは明らかである。

肉食とヴェジタリアニズムの視点からこの対立がよく表されている作

品「ドイツ人の食卓」と、「ブレッツヘンマツヘルの細君結婚式に出る」、「ルフト・バート」を中心に見ることによって、マンズフィールドのフェミニズムについて考察し、彼女のフェミニズムがどれほどのものかを考えてみる。

(二)

一九一〇年三月に『ニュー・エイジ』誌に掲載された「ドイツ人の食卓」には、最初から最後まで、保養にきているドイツ人と主人公「私」の民宿における昼食とそこで交わされた会話が記録されている。メニユーは、パン・スープ、仔牛の肉、キャベツの酢漬けとジャガイモ、肉に赤スグリとほうれん草の添えたもの、杏のとろ煮、サクランボに泡だったクリームのかかったケーキである。これらを食しながら、ドイツ人たちは、自分たちは大食いのイギリス人に比べれば少食だと話す。これだけ食べれば、少食とは言えないが、イギリス人は大食であるという思いこみと、決めつけを披露することによって、マンズフィールドはドイツ人たちの愚かさを浮き彫りにする。「私」というイギリス人が食卓を共にしているの、イギリスのことをこき下ろしにかかっているのだ。「私」をマンズフィールドとするなら、「私」はニュージールランド人であり、イギリス人ではないが、イギリスの話に対して「私たち」と言っているの、この作品では、「私」はイギリス人の設定である。

そしてこれらのイギリス人の食事に関する話題と自分たちのそれぞれの治療の話に交じって、「私」は隣の未亡人からヴェジタリアンなのかと尋ねられ、以下のように言われる。

「本当なんですか、あなたヴェジタリアンなんですか？」未亡人

がヘアピンで歯を突つつきながら尋ねてきた。

「ええ、そうですね。この三年間肉類を食べておりません。」

「まあ呆れた。お子さんはいらっしやるの？」

「いいえ。」

「ほら、ごらん下さい。そういうことになるんですよ。野菜だけ食べて子供ができるだなんて聞いたことがない。できるわけありません。でもイギリスではもうこどもの多い家庭なんてないんですよ。女性参政権運動とやらで女は子供を産む暇も無いんでしょう。」

私は九人の子持ちです。おかげで一人も欠けません。丈夫ないい子ばかりです——もつとも最初の子が生まれてから後はどうも——。」

(二六六)⁵⁾

ここには、ヴェジタリアンには子供が生まれない、イギリスは子供の数が少ない、それはイギリスの女性が女性運動をやっているからである、という思い込みが盛り込まれている。(イギリス、ヴェジタリアン、子供が生まれにくい、女性運動)ということがしつかりと結びついている図式である。逆に言うなら、ドイツ人の未亡人に埋め込まれているのは、ドイツーヴェジタリアンでない——女性は多産——女性運動はしない、ということが結びついている図式である。その後の「私」が夫の好きな食べ物を知らないことを知った未亡人の台詞、「三年も一緒にいて夫の好きなものが判らないような女が、夫を家に泊めておくことができるわけがない」「それ(夫の好きなもの)が判らなくて、一週間だって、主婦として家庭をやっていくことはできないでしょう」という言葉から(一六七)、この未亡人の図式にあるのは、女性運動はしないどころか、女性性は家庭で夫に尽くすものという考えであり、さらに、先ほどから彼らが盛んに肉食していることから、ヴェジタリアンでないどころか肉食を

することは大切であるという意味に強められたものである。もう一度言うなら、ドイツ―肉食―女性が多産―夫に尽くし家庭を守る女性という図式である。未亡人が四つ子を産んだ友人の話題を出し、その友人と夫が喜びのあまり晩餐会を開いて、四つ子をテーブルの上に並べたという話は、子供を食卓に載せる肉のイメージで捉え、まさに、子供の生産と肉食とが結びついていることを物語り、肉食―多産―家父長制の家庭という図式を強化する。この未亡人の抱えている図式は、同じ食卓で「私」と未亡人の会話を聞いていたドイツ人が「ドイツは家族を大切にしている」というごとく（二六六）、ドイツ人たちがこの図式を大切にしていることが示される。イギリスが自分の国の女性たちにこの図式を壊させたことを呆れ馬鹿にしているのだ。

国を挟んで、対照的な二つの図式が示されたわけである。もちろんドイツ人たちが本当にこの図式をたてているかどうかは問題ではない。マンスフィールドが、自分の知っている図式を二つの国に振りあてただけのことである。実際には、ドイツにおいてもヴェジタリアニズムは広まっており、ドイツ・ヴェジタリアン・ソサエティは一八六七年に設立されている。一九世紀のヨーロッパ社会において、ヴェジタリアニズムが活発に実践されたのは、ドイツ、アメリカ、イギリスであり、イギリスのヴェジタリアンの設立は一八四七年、アメリカは一八五〇年である。一九〇八年にはインターナショナル・ヴェジタリアン・ソサエティが設立されている。

さらに、もちろん、肉食とヴェジタリアニズムに関する図式も、画一的なものではなく、ここでマンスフィールドがドイツ人の未亡人に託した図式が一番正しいというわけでもない。ヴェジタリアニズムの主張は様々で、とくに出産とヴェジタリアニズムとの関係に関する図式に異論を

唱えるヴェジタリアンもいよう。

しかしながら、肉食とヴェジタリアンの対立にまつわる男性支配と女性の隷属に関する考えは当時受け入れる人の多かった考え方である。キャロル・アダムズがその著『肉食という性の政治学』（一九九〇年）において、「肉は男性の役割との関連性があり、その意味は固定化されたジェンダーの仕組みの中で繰り返される」と言っているように（一三）、ヴェジタリアン・ソサエティができる以前から、肉食とヴェジタリアニズムの対立にジェンダーを組み合わせるとらえ方は根強く存在していた。そのとらえ方のなかで一番広く受け入れられていると思われるのが、家父長制に関する組み合わせである。

肉食にまつわる家父長制や女性観がどうして成り立ったのか、つまり、人々の頭の中で肉食と父権文化がいかに関係しているかを少し考察してみる。キャロル・アダムズの著の訳者である鶴田静は『ベジタリアンの文化誌』（二〇〇二年）において、狩猟時代の性役割の仕組みから肉に関する男尊女卑の支配関係が生まれたとする「神話」を説明する。鶴田は一九五六年の人類学者シャーウッド・ウォッシュバーンの説をひいて、狩猟時代、「成人男性が肉を運んできては、男性優位を普遍的なものにする基盤を作り上げた。肉を得る者は得ないものより優秀であり、得ないものを養育する義務があり、したがって得ないものを支配し服従させる権利がある」という「神話」ができたと言う（二二七）。鶴田の言う通り、これは男性本位の解釈だが（二二七）、この「神話」は強い敷衍力を持つている。二〇世紀の初頭、マンスフィールドが活躍する時代においても、この「神話」を信奉する人は多かった。鶴田もよい例証として引用しているが（三五）、バーナード・ショウ（一八五六一一九五〇年）彼はヴェジタリアンでフェミニストだった）が『メトセラへ還

れ』（一九二二年）という戯曲の中で、ノアの洪水前のメソポタミアのオアシスでアダムとイヴの子供のカインに次のような台詞を言わせている。カインは畑を耕して穀物やくだものを食べるアダムとはちがつて、動物を殺して、火を使って調理した肉を食べて生きていくと宣言している。

俺は狩猟する。俺は体力が尽きるまで戦う。命がけでイノシシを殺して女に投げ与え、料理させるんだ。彼女の労働の報酬として一口分は肉の分け前をやるう。じゃないと女は、他には食べ物を手に入れないんだから。分け前をやるんだから、彼女は俺の奴隷になるのさ。俺を殺す奴は分捕り品として俺の女を手に入れるだろう。男は女の主人になるべきなのだ、女の赤ん坊や雑役係になるんじゃない。（二二二）

肉を持つてくるのは男性であり、女性はその残りの分け前にあずかる。分配してもらうことで女性は男性の奴隷になり、男性はその女性の主人になる。そして、一つの解釈では、女性は少しの肉を男性から分けってもらうお礼として性の相手をし、常に子供を抱えることになり（鶴田 三六）、男性は肉の獲得を、女性は出産と育児をすることになる。もちろん、男性が留守の間には、女性たちは木の実などの食べられる植物の採集と、植物栽培、籠や壺などの製作、火の保存なども行っていただろう（三二六）。こうして分業が行われ、女たちがそれなりの仕事をしていても、分業する男女は平等にならず、肉の獲得への評価は偉大で、男性優位の関係が築かれたというのだ。父権社会はこうして始まり、父権社会の根底にあるのは、この肉の獲得に始まる支配者と奴隷の男女関係である。この「神話」がどこまで真実であるかは別として、「ドイツ人の食卓」においてドイツ人未亡人が無意識に抱いているのはこの「神話」で

ある。この「神話」においては、肉食をしない女性は、男性の分け前を貰おうとはしない。つまり、貰わないので、お礼として性の相手をする必要がなく、子供が生まれぬことになる。そして肉食をしない女性は肉を持つてくる男性に関心を示すことなく、何が好きな食べものかも知らない。家庭の切り盛りなどしないのだ。それどころか、自分が肉の獲得者になろうと、つまり稼ぎ手になろうと、女性解放運動までする呆れた存在なのだ。肉食をしないヴェジタリアンは父権社会を破壊する危険分子である。肉食をしないことによって体力がつかず、子供が生まれぬという表面的な意味合いのものではないのだ。

たしかに、この「神話」を信じるにせよ、信じないにせよ、ヴェジタリアニズムがフェミニニズムと結びつくことは多い。ヴェジタリアン・ソサエティの会員数は圧倒的に男性会員のほうが多かったが、ヴェジタリアニズムを父権社会の挑戦とする女性たちがいた（アダムズ 一五〇）。とくに、二〇世紀初頭のイギリスでヴェジタリアニズムとフェミニニズム、なかでも、女性参政権運動は結びついていった。女性参政権論者、及び女性参政権運動の女性たちの中にヴェジタリアンが数少なからずいたのである。たとえば、男性では、先程作品を挙げ、またマンスフィールドの知人であったジョージ・バーナード・ショウやエドワード・カーペントナー（一八四四―一九二九年）。女性では、レディ・コンスタンス・リットン（一八六九―一九二三年）、レオノラ・コーヘン（一八七三―一九七八年）、シャーロット・デスパード（一八四四―一九三九年）が挙げられる。上記の三人の女性たちはヴェジタリアンであり、猛烈な女性参政権運動家であった。三人ともが、女性参政権獲得運動のデモンストラレーション中に警察に捕まり、投獄され、そこで抗議の絶食をつづけ、悪名高い強制食処置を受けている。ヴェジタリアン・フェミニニストたち

が肉食を嫌った理由は、それぞれ様々で、動物への哀れみ、動物を人間の同類とみなしてカニバリズムを避けるため、宗教的理由、肉が狩猟や屠殺の過程を経ることから血で穢れているというイメージを生み、血や死体を自分の体中に入れることの拒否、女性と動物の同一視から、屠殺を自分たち女性の虐待と捉える認識（アダムズ 一五二、一五九）、そして自分の体調と健康のため等、他にもあるが、フェミニズムの視点から見ると、彼女たちの肉食拒否行動は、男性の支配を拒絶し、父権的な社会へ挑戦する行動であると解釈された（アダムズ 一五〇、一五九）。彼女たちは男性が支配する父権社会を壊し、女性の力が大きく作用する社会を築こうと社会改革を考えていたのであるから。彼女たちはただの政治への女性参加を狙ったのではなく、男性中心の社会を崩そうとしたのだ。

さらに、肉食は男性を戦争と結びつける。「男は狩人、男は兵士」。これはアメリカのフェミニスト、シャーロット・パーキンズ・ギルマン（一八六〇—一九三五年）の「彼の宗教、そして彼女の」（一九二二年）という本の冒頭部分であるが、この言葉にあるように、狩猟で動物を殺す男性は暴力行為を正当化し、戦争をも正当化する。肉食は戦争を正当化することへとつながるのだ（アダムズ 一五九）。逆から言うなら、ヴェジタリアニズムは平和主義と結びつく。肉食をめぐる再び、肉食、戦争、父権社会の図式とヴェジタリアニズム、平和主義、フェミニズムの図式がたてられることになる（アダムズ 一五一）。ギルマンもヴェジタリアンであり、彼女の理想郷を書いた『フェミニニア』（一九一五年）には、男性支配、もっとはっきりいえば、男性がいない、そして肉食もない、戦争もない世界が描かれている。

そして、この図式に従えば、肉食する女性は、戦争に加担することに

なる。子供をたくさん産むこと自体が、国力増強となり、戦争前や戦争中は「産めよ、増やせよ」が戦争する多くの国において国民を啓発する標語であったように、多産したいが戦争のための国力増強と結びついている。肉食は男性の暴力を肯定することになり、戦争を支持することへとつながるのだ。「ドイツ人の食卓」においても、侵略戦争のことが話題にでてくる。

旅人が話しかけてきた。「あなたは侵略されることも心配しているのでしょうか？」

「ええ、私もは心配なんかしておりませんわ。」私は居住まいを正した。

「では、今からいたすべきですか、」ラート氏が言う。「あなたのところには軍隊というものがない——少しは若いものもいるけれど、その欠陥はニコチンの毒に染まっている始末ですからな。」

「心配しなされるな。我々はイギリスなんか欲しがっちゃいませんよ。もしそうだとしたら、とつくの昔に我々のものになっていたはずですよ。ほんとうに欲しがっちゃいませんよ。」ホフマン氏が言った。

——中略——

「私もだつて、決してドイツを欲しがってなんていませんわ。」と私は言った（一六七）

ドイツ人たちはひ弱なイギリスなど、簡単に倒して領土を奪えると思っている。食卓で何の脈絡もなく侵略について話題にするドイツ人たちを、やはりマンズフィールドはこの作品に肉食、戦争、父権社会の図式を潜ませている。

(三)

この短編集において子どもを持つことが幸せであると捉える女性観への批判は、肉食とヴェジタリアンの関連がなくても、見られるが、肉食と出産を結び付ける視点は、一九一一年七月に『ニュー・エイジ』誌に掲載された「レーマンの店で」と一九一一年三月に『ニュー・エイジ』誌に掲載された「誕生の日」、そして一九一〇年七月に『ニュー・エイジ』に掲載された「ブレッツヘンマツヘルの細君結婚式に出る」に使われている。どちらも肉食のイメージが女性の出産嫌悪を表している。「レーマンの店で」には、雇い主の妻の出産に際して、主人公の若い娘、ザビーナの恐怖と嫌悪が描かれているが、料理人のアンナは豚、皿洗いのハンスはソーセージという具合に、ザビーナのいる店の他の従業員は肉食のイメージが与えられている。そして、ザビーナはお産の近づくおかみさんを頭に描いて、「いつか自分もあんな体つきになるなんて——あんなに苦しい思いをするなんて嫌だ」(一八二)と考えるのだ。「ブレッツヘンマツヘルの細君結婚式に出る」において、ブレッツヘンマツヘルの細君は自分に度重なる出産を与える夫に肉とパンの夜食を作り、一九一一年三月に『ニュー・エイジ』誌に掲載された「誕生の日」では、お産で子供を取り上げる看護師を生焼けのビフテキに例える医者が出てくる(二〇九)。

すなわち、この短編集においてマンズフィールドは、肉食を支持することなく、父権社会における女性は出産という考え方に賛成しない姿勢をとっている。この姿勢がもつとも明確に表れているのが、「ブレッツヘンマツヘルの細君結婚式に出る」である。一九一〇年七月に『ニュー・

エイジ』誌に掲載された人の子持ちの主人公ブレッツヘンマツヘルの細君は、その日、村の友人の結婚式に夫ともに出席する。夫は暴君で威張り散らすだけの、何の思いやりもない男である。細君は一日中忙しく働き、それでも自分の夫を偉いと思っている。しかし、出席した結婚式の最中、肉屋の女将さんのルツプさんの隣に腰掛けながら、夫が結婚祝いのコーヒーポットを「まるで赤ん坊でも抱くように持って行く」さまを見て、そして、花嫁がポットのふたを開けて、そのポットの中に乳瓶と瀬戸物の人形の揺りかごがあるのを見つけてさまを見ているとき、彼女のなかに違和感が湧く(一八八)。周囲のお客たちは花嫁の様子に笑い転げるが、細君にはなぜおかしいのかわからず、笑っている周囲の人たちが、知らない人のように思え、自分を笑っている気がした。「全ての人自分がより強いので、自分のことを笑っている気がした」(一八八)。そして家に戻った細君は夫に肉食の夜食を用意しながら、自分が夫と共に初めて家に向かった最初の夜のことを思い出し、「では、何のためかしら」という疑問をつぶやきつづける(一八八)。そして、夫の差し出す脂肪のたっぷりついたパンのかけらを断り、結婚後の初めての夜について話題にする夫を遮る。一人部屋を出て、寝室に行った彼女は、「いつも同じことだわ。世界中が同じことだわ。けれど、なんとということでしょう——くだらない」と思う(一八九)。彼女はベッドに横になると、「折檻されるのを恐れることのように腕で顔を覆った。ブレッツヘンマツヘルの氏がよるめきながら入ってくる」(一九九)。ここには、結婚による夫の性暴力をメアリー・ウルフストンクラフトの言う「結婚という家庭内レイプ」と捉える見方が呈示されている。ブレッツヘンマツヘルの細君は女のつとめとして、夫の性暴力を当たり前の如く受け入れ、その性暴力による五回の出産を重ねてきたのだが、その日初めて疑問を感

じ、くだらないと思う。しかし、それを強く意識し、行動に出ることは
ない。いつものように女のつとめを果たそうとするところで物語は終
わっている。マンスフィールドはブレッケンマツヘルの細君の姿を描く
ことよって、家庭内レイプと度重なる出産を強いる家父長制社会を、
そしてこの女性の生き様を当たり前とする考え方を批判している。この
ときブレッケンマツヘルの細君が肉食文化の中に暮らし、自分の人生に
疑問を持ったちよどそのときに、夫の差し出す肉汁の付いたパンを
断っていることは、彼女の肉食の意味する多産と家父長制を否定する瞬
間を表している。肉食の象徴を用いてマンスフィールドはたくみにメー
セージを伝えてくる。

(四)

このように、肉食に関する図式をマンスフィールドはたくみに使用
し、フェミニストの意見を展開しているが、果たして彼女はフェミニス
トとして女性が生きやすい国や社会の実現を願っていたのだろうか。上
記の「ブレッケンマツヘルの細君結婚式に出る」の終わり方が、いつも
のマンスフィールドの作品の終わり方に多く見られるように、一瞬目覚
めそうになったところで、もとの日常の意識のなかに戻ってしまうよう
に、マンスフィールドにおいて彼女の作品のパターンがなかなか主人公
に意識改革をもたらすことはないが、そもそも、彼女には国や社会を変
えたいという意識はなかったと思われる。フェミニストとしての問題定
義をしたり、作品を書いたりしても、彼女には新しい世界の実現を夢見
る気持ちにはなかったと考えられる。そのことは、彼女がヴェジタリアニズ
ムを展開しているこの作品集のもう一つの作品からうかがえる。一九一

〇年三月に『ニュー・エイジ』誌に掲載の「ルフト・バート」は大気浴
場という意味で、主人公の「私」が、気浴治療を受けているときの話で
ある。大気浴場では、身を隠すものをほとんど持たない状態で、治療を
受けている人たちは、歩き回ったり、固まって自分の病気や治療のこと
を喋ったりしている。この大気浴という療法は一九世紀のドイツ発祥の
「自然に返る」運動の一環で、自然の大気、日光や風を裸の身体に浴び
ることよって、身体を健全にしようとするものである。一九世紀末に
はイギリスにも導入されている。その治療を受けるために「私」は大気
浴場（木立のない囲われた庭、男女分かれている）に入り、他の人たち
の話を聞いたり、話かけられたりしているのだが、ヴェジタリアンの女
性が傍で他の女性に話しているのを耳にする。ヴェジタリアンという言
葉は使われていないが、その女性の食べ物は、生の野菜と木の実だけで
あり、彼女の説明には明らかにヴェジタリアニズムの肉食への敵意が披
露されている。

「この頃は丸一日、ここで過ごします」と彼女（色の黒い女）が答
えた。「私流の『治療』をやっているんです。生の野菜と木の実し
か食べません。それで一日ごとに私の精神は強くきれいになりま
す。結局、あなた方に何が期待出来るというのです。たいていの人
が頭の中に豚の細胞や牛の断片を詰め込んで歩き回っているわけ
です。すばらしいことに、世界は自然にあるがままに価値があるものな
のです。ですから私は天から与えられたシンプルな食べものだけを
食べています——彼女は傍の小さな袋を指さした——「レタスに
にんじんにジャガイモ。それから木の実には結構十分な、合理的な
食べものになるものがあります。私はこれを水道水であらい、生の
まま食べます。害の無い大地から出たままを食べるわけです——新

鮮でちつとも汚れていない。」(一七六―七七)。

肉食は肉の解体や料理という手間を必要とするように、人間にとって不自然な食事であり、かつ、残虐に殺された動物の血で汚れている。一方、右の引用の女性の食事はシンプルで自然な食事である。人間は自然な食べ物を食べることによって、健康になり、人間の魂は清められる。この女性の主張は、じつさい、肉食という不自然な習慣を嫌ったヴェジタリアンの主張と合致する。肉食という不自然な食事をしないことを人間の身体は要求しており、健康になるにはこの不自然な食事をやめるべきであるというヴェジタリアンの主張である(アダムズ 一八八)。そして、「魂の食事はヴェジタリアンの食事であり」(アダムズ 一九一)、魂と精神を清めるためには、このシンプルな大地の恵みだけを摂取すべきなのである。この女性の「治療」とはヴェジタリアンの理にかなったものである。この自然な食べ物を好み不自然を嫌うヴェジタリアニズムの考え方は、「自然に返る」という点において、大気浴治療の自然崇拜と共通するところがある。

このヴェジタリアンの女性にたいして、「私」は呆れて「一日中、それ以外は何も食べないのですか」と聞き、賛成の意を表しない。同じ「私」が主人公でも、「ドイツ人の食卓」の「私」と違うようである。この作品の「私」はヴェジタリアンではないのだ。そして国籍に関してこの作品の「私」は「ドイツ人の食卓」の「私」と違うようである。ヴェジタリアンの女性がどこの国の人かと聞いてくると、「私」は出身国を明かさない。

「あなたはアメリカの方ですか？」野菜の女が私のほうに顔を向けた。

「いいえ。」

「では、イギリスの方ですね。」

「そうとも言えないんですが——」(一七七)

そして「私」は野菜の女が話しかけているにもかかわらず、その場を離れてブランコに乗る。白い雲のたなびく青空のしたで、ブランコに乗って身体を揺らしていると、「私はうきうきと自由に幸せに感じた——子供みたいな気分になった」。そして「草の上に座って話している連中にべろりと舌を出してやりたくなった」(一七七)。このブランコに乗る行為は象徴的である。「私」は地から離れ、どこの国にも足を付けずに漂流している。アメリカ人でも、イギリスの人間でもない「私」はニュージールランド出身だと言うことを明かすこともない。「私」はどこにも所属しない漂泊の人であり、どこの国にも所属しない、また、したくない人間なのだ。

このように所屬意識のないとき、国や社会を変えたいという意識や願いはなくなる。「私」はヴェジタリアンではなくなり、ヴェジタリアンにひたすら驚く存在となる。

父権社会とフェミニニズムの対立を背負う肉食とヴェジタリアニズムの対立の図式は所屬している国家や社会があつてこそ、意味を持つ。自分の国という意識がない者は、国の改革も願ったりはしないのだ。自分が漂泊者であることを意識するとき、「私」はヴェジタリアンではなくなり、従って、フェミニニストではなくなる。

(五)

マンスフィールドは肉食とヴェジタリアニズムの対立の構図をうまく利用して、フェミニニズム思想を一九一〇年、及び一九一一年の作品に描き込んだ。しかし、フェミニニズム思想が本当に彼女の本心であったのか

どうかは、疑問である。「ルフト・バート」におけるこの構図の無化に示されているとおり、当時の彼女にとって変革したいと思うほどの、所属意識を持つ社会と国家はなかったはずである。一九一五年一〇月の弟の死によるニュージーランド再評価と帰属意識以前の彼女は、植民地出身者にたいするイギリス人の偏見に遭い、イギリスに帰属することもできず、かといってニュージーランドに返りたいとも思わず、精神的に根無し草の状態にあった。そのなかで彼女は漂泊者としての自覚を高めていったと考えられる。たしかに、妊娠という経験から、女性にとって妊娠、出産が不利益に繋がることは自らが身を以て知ったことであろう。しかし、ドイツ療養中において、わざわざ友人にロンドンの孤児を手配してもらい、その子供を連れてドイツの療養地を回ったことを考えると、『ドイツの宿にて』に収録されたフェミニズムが彼女の心からの叫びであったとは言いがたい。やはり、ビアトリス・ヘイスティングスのフェミニズムへの配慮もあって、雑誌掲載のチャンスを狙っていた彼女は浅薄なフェミニズムを抱えていたのではないだろうか。もちろん、その後の作品にも肉食を使用したフェミニズムは書かれているけれども。

【注】

- (1) Vincent O'Sullivan and Margaret Scott, *The Collected Letters of Katherine Mansfield*. Vol. III, 5 vols. Oxford: Clarendon Press, 1987, 33, 17, Oct. 1919.
- (2) たなかみづほ, "Patricia Moran, "Unholy Meanings: Maternity, Creativity, and Orality in Katherine Mansfield" *Feminist Studies* 17:1 (Spring 1991): 105-27. Diana R Harris, "Milk, Blood, Ink: Mansfield's Liquids and the Abject" *Journal of New Zealand Literature*, 32:2 (Sept 2014) 52-67.
- (3) ビアトリス・ヘイスティングスは南アフリカのフェミニスト。出産と

育児を女性の仕事とする因習を嫌い、打破しようとしていた。マンスフィールドは彼女と、彼女の恋人であるオーレイジのおかげで文芸雑誌『ニュー・エイジ』に作品を掲載するようになった。しかし、ジョン・ミドルトン・マリが現れて、彼の雑誌『リズム』を手伝い作品を掲載できるようになると、オーレイジたちのもとを去っていく。ビアトリス・ヘイスティングスのフェミニストとしての主張と当時のフェミニストとの位置関係に関してはLucy Dalap, *The Feminist Avant-Garde: Transatlantic Encounters of the Early Twentieth Century*. Cambridge: Cambridge UP, 2009, Chapter 1 に詳しく。

- (4) マンスフィールドがフランスやスイスの療養中にこの二人に手紙を出していることから、ロンドンに住んでいたころ、この二人と知り合っていたことは確かである。

- (5) Gerri Kimber, *The Fiction of Katherine Mansfield*. Edinburgh UP, 2013. 和訳は、多少変更はあるものの、黒沢茂『キャサリン・マンスフィールド全集』(東京、垂水書房、一九六六)、全三巻を使用させていただいた。

- (6) たとえば、一九一〇年八月『ニュー・エイジ』誌に掲載された「フィシャ―夫人」において、子供を持つことが夫と妻のあいだのもっとも強い絆であると仄めかし、胸に子供を抱く妻の姿を見ることが夫をつなぎ止めるのに必要だと考えるフィッシュャー夫人に対して、主人公の「私」が「子供を産むことはあらゆる仕事のうちでもっとも恥ずべきものだと思えます」と言うごとく(一九七)、この作品においてフェミニズム批判の一番の的となっているのは、出産し子供を持つことこそ女性の幸せと考える女性観である。

- (7) ジャン・ジャック・ルソーもヴェジタリアンであり、ヴェジタリアニズムがルソーの理想の食事であったことは注目に値する(アダムズ一四三)。

- (8) マンスフィールドはドイツでの療養中流産の精神的痛手を癒やすために、友人に頼んでロンドンのスラム街から浮浪児ウォルターを引き取り、つれて回っていた。

- (9) 例えば、「前奏曲」(一九一六年)に肉食をせず、かつ出産や子育てを嫌うリンダが描かれている。

【引用文献】

- Adams, Carol, *The Sexual Politics of Meat*. New York: The Crossroad Publishing Co. 1990. 鶴田静 訳『肉食とマンスフィールドの政治学』東京：新宿書房、一九九四年。
- Delap, Lucy, *The Feminist Avant-Garde: Transatlantic Encounters of the Early Twentieth Century*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Harris, Diana R. "Milk, Blood, Ink: Mansfield's Liquids and the Abject" *Journal of New Zealand Literature*. 32:2 (Sept 2014) 52-67.
- Kimber, Gerri and Vincent O. Sullivan, *The Collected Fiction of Katherine Mansfield, 1898-1915*. Edinburgh UP, 2012.
- 黒沢茂『キャサリン・マンスフィールド全集』東京：垂水書房、一九六六年。
- Moran, Patricia "Unholy Meanings: Maternity, Creativity, and Orality in Katherine Mansfield" *Feminist Studies* 17:1 (Spring 1991): 105-27.
- O'Sullivan, Vincent, and Margaret Scott, *The Collected Letters of Katherine Mansfield*. Vol. III, 5 vols. Oxford: Clarendon Press, 1987.
- Shaw, George Bernard, *Back to Methuselah*. London: Constable Co., Ltd, 1949.7
- 鶴田静『ヴェジタリアンの文化誌』東京：中央公論社、二〇〇二年。